

8. 下肢閉塞性動脈硬化症にLDL吸着療法を用いた一例 (外科学第5)

小崎浩一, 内山正美, 岩本 整, 浜 耕一郎, 久田義也,
松野直徒, 小崎正巳, 長尾 桓

(八王子医療センター循環器外科)

前田光徳, 首藤 裕, 工藤龍彦

LDL吸着療法は、当初は家族性高脂血症患者の虚血性心疾患に対しては限定的に適用されていた。しかし最近では高脂血症を併発する閉塞性動脈硬化症(ASO)患者に対する適応が急増しつつある。今回我々は、高脂血症を伴わないASOの一例に、LDL吸着療法を行ったので、その臨床効果について報告する。患者は、64歳、男性でFontaineⅣ度。LDL吸着療法を10回行ったところ間歇性跛行はあるものの、歩行可能距離は延長し、自覚症状も改善した。これは、LDL吸着療法により、動脈内に沈着しているLDLの減少による内腔拡大、動脈壁内の硬化性浸潤組織の減少による血行の改善、血液粘稠度の低下による末梢循環の改善がおこるためと考えられた。今回の経験から、高脂血症を伴わないASOに対しても、LDL吸着療法が効果があることを認めたので、今後症例を重ねて検討したい。

9. 血中リポ蛋白(a)濃度と頸動脈病変

(老年病学)

中村喜江, 岩本俊彦, 杉山 壮, 木暮大嗣, 高崎 優

【目 的】Lipoprotein(a)[Lp(a)]と動脈病変との関係を知る目的で、頸動脈超音波断層検査(US)を検討した。

【方 法】脳血栓症を含む高齢者221例を対象として、血中Lp(a)値より層別に3群(20mg/dlと40mg/dlで高値群、中間群、低値群)に分類し、US所見を検討した。US所見はplaque(P)の輝度により高輝度P、低輝度Pおよびこれらの混在(混在P)に分類した。

【結 果】1)各群の背景：高値群、中間群、低値群は各々45例、72例、104例あり、各群の年齢(75-76歳)、性比(1.0-1.1)、危険因子の頻度に差はみられなかった。2)US所見：頸動脈病変は高値群(71%)が低値群(51%)より有意に多く、中間群(56%)より多い傾向を示した。病変のほとんどはPで、高輝度Pの個数に対する低輝度+混在Pの個数の比は高値群で有意に高かった。

【結 語】Lp(a)高値例で低輝度Pが多かった成績は、低輝度Pが脂質沈着、血腫を示すとされることから、Lp(a)がPの進展において脂質沈着や血腫形成に深く関与していることを示唆していた。

10. 頸動脈超音波所見からみた大動脈瘤と 閉塞性動脈硬化症の相違

(老年病学)

杉山 壮, 岩本俊彦, 木暮大嗣, 高崎 優,
(外科学第2) 福島洋行, 石丸 新

【目 的】大動脈瘤(AA)と閉塞性動脈硬化症(ASO)における頸動脈の形態学的な相違を臨床的に検討した。

【方 法】AA56例(平均72歳)およびASO 73例(71歳)を対象として、7.5MHzBモード超音波断層法によって左右頸動脈を観察した。すなわち総頸動脈の血管径と血管壁厚(IMC)を最大拡張時に計測し、両者間で比較した。

【結 果】1)危険因子：高血圧はAA(80%)に、糖尿病、喫煙はASO(各66%、90%)に多かった。2)血管径：血管径は左右ともAAがASOより有意に大きかった。3)血管壁厚：血管壁厚は左右ともAAがASOより大きい傾向を示した。4)血管病変の頻度：プラークを含む病変は、両者(AAの75%、ASOの86%)に高頻度にみられたが、特にASOでは両側性病変が49%と多かった。

【結 論】両者では頸動脈にも差を認め、各々固有の血管病変が全身に及んでいる可能性が示され、また脳循環に及ぼす影響にも差異が生じうると考えられた。

11. Interlocking Detachable Coilを用いた脳動脈瘤の治療

—特に親動脈閉塞について—

(八王子医療センター脳神経外科)

橋本孝朗, 中島伸幸, 中西尚久, 鬼塚俊朗, 中島 智,
福田忠治, 蓮江正道

(筑波大学 脳神経外科) 兵頭明夫

近年の血管内手術の進歩の結果、従来直達手術が困難であった脳動脈瘤の治療が少ない侵襲で可能な場合が多くなってきた。我々は、平成9年2月までに31例の脳動脈瘤に対してInterlocking Detachable Coil(以下IDC)を使用し血管内治療を施行した。そのうち11例に親動脈閉塞を行ったので検討を加え報告する。

症例は29~67歳、平均49.4歳、男性4例、女性7例であった。椎骨動脈解離性動脈瘤5例、内頸動脈瘤3例、椎骨動脈合流部動脈瘤1例、外傷性動脈瘤1例、AVMに合併した末梢性後大脳動脈瘤が1例であり、発症形態は、クモ膜下出血5例、mass effect 4例、頭痛1例、鼻出血1例であった。全例、予定部位での閉塞を行い得た。

IDCはdetachするまではreplacementが可能であり、操作性も良く、親動脈閉塞による治療において、比較的安全かつ正確に行うことができると考えられた。